慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦後日本社会と原爆被害者の生活世界に関する社会学的考察
Sub Title	
Author	八木, 良広(Yagi, Yoshihiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2010
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.70 (2010.) ,p.144- 147
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成21年度博士学課程生研究支援プログラム研究成課報告書
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000070-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

星野ひろし，2001,「東京空襲・記録運動の現在」『歴史評論』（616）pp. 63–68
小関隆，1997,「コメモレイションの文化史のために」『記憶のかたち―コメモレイションの文化史』柏書房
ピエール・ノラ／谷川稔訳，2002,『記憶の場―フランス国民意識の文化＝社会史』岩波書店
東京空襲を記録する会，1975,『東京大空襲・戦災誌 第1－5巻』講談社
山本唯人，2005,「「分断の政治」を超えて―東京大空襲・慰霊堂・靖国」『現代思想』33(9) pp. 199–209
東京空襲犠牲者遺族会会報『せめて名前だけでも』（2001年–2009年）

戦後日本社会と原爆被害者の生活世界に関する社会学的考察

八　木　良　広

1．はじめに

本報告では，まず本節において筆者の研究目的とその背景，研究方法，特色と意義などについて概観し，次に2において，2009年の研究成果として掲載論文と学会発表の内容について述べる。そして最後に3で今後の課題について触れたい。

筆者の研究課題は，原爆被害者（以下，被爆者）と原水爆禁止運動，平和運動といった彼／女らを取り巻く政治的社会的状況に関する調査研究を通して，第二次世界大戦を生き延びた経験者が戦後日本社会のなかでどのような問題に直面しそれに対処し，生きてきたのかを明らかにすることである。戦争体験には，兵士の戦争体験や銃後の体験，特攻隊員の体験，被爆体験など複数種類あるが，筆者は被爆体験に焦点を当てている。戦後，特に冷戦期に他の体験以上に社会の中核に位置付けられてきたのが被爆体験であり（野上 2008），それが戦争の認識をめぐる主要な問題点をその時々に如実に浮き彫りにしてきたからである。マスメディア上で頻繁に象徴的に表現される「唯一の被爆国」という誤った言説は，被爆体験が単に個人が抱えるものというよりもむしろ，（戦後規定された）「日本人」一般が主に国外の人々に向けて意識的に保持することができるナショナリスティックな特権であることを示している。事実それは「日本人」にとって核兵器廃絶を説得的に唱えることを可能とする後ろ盾であった。しかし，冷戦期日米安全保障条約に基づき政治的，軍事的，経済的に依存してきた日本国のその態度は相対する相手により異なり，勿論核戦争の勃発や戦争を含む様々な暴力の抑止に大きく貢献したが，米国や西側諸国のヘゲモニーに加担しているという意味で歪んだものだった（藤原 2001）（米山 2004）。

冷戦期の国際関係のなかで日本の立場が決定づけられていく中で，日本社会は固定的な被爆者イメージを作り出してきた。被爆者の生きざまについての物語は主に被爆前後に本人が見聞きした出来事によって構成され，被爆者は心身ともに苦悩を抱えその日暮しを強いられるが最終的に原水爆禁止運動や平和運動などとの出会いにより核兵器廃絶への思いを生きる活力として保持するようになる，といった内容である。そして原爆死没者に対して自分は未だ生きていることに後ろめたさを感じ被爆者は「生かされている」と語る。その独特な響きをもつ生の表象は戦後の社会の中でマスメディア上で繰り返し生成・参照されて，結果被爆者の生きざまを示す代表的な指標となっていった。しかし，その表象から戦後日本社会のその時々の政治的社会的状況を推し量ることはほとんど不可能であり，それは社会と切り離された個人の生を示すものにすぎなくなっている。個人史から社会史を適切にまなざすことの不可能

性は，米国の核の傘の下で核廃絶を唱えるといったアンヴィバレントな状況を等閑視することにつながり，特に身を賭して核廃絶を願う被爆者の生きづらさを助長させてしまっている。さらに言えば，被爆者の体験講話や自分史，手記等を通して彼／女らの生に触れる戦後生まれの（特に）若者にとっても，個人史と社会史の関係性の不明瞭さは，戦後日本社会の歴史や現代社会への想像力を刺激するものとはならない（ひいては自分自身の立場の再帰的捉え返しにはつながらない）。それらは被爆者が支援者に望んでいることの中核にあるものである。よって，個々の被爆者の生活史と戦後日本社会とのつながりを明確にさせ，そうすることで抽象的な被爆者イメージを瓦解させるととことが必要となってくる。

筆者は以上のことを目的に被爆者本人にインタビューを実施し，また彼／女らを取り巻く状況を捉える為に支援者へのインタビューや被爆者団体主催の慰霊祭，研修会，イベント等の参加，広島長崎慰霊墓参の同行といったフィールドワークも実施している。研究の対象は東京の被爆者団体東友会の活動を中心となり動かしている被爆者やそれに積極的に参加している被爆者である。東京在住の被爆者は比較的平和運動の表舞台に立たされる機会が多く，故に抽象的な被爆者イメージにもさらされやすい。そのため彼／女らがそれに対して自ずと保持している見解は被爆者イメージのあり方の把握とその瓦解という研究目的を遂行するには最適である。インタビューは全て逐語的に文字起しし，参与観察した際には必ずフィールドノーツを付けて，それら全てを分析のためのデータとしている。現在までに被爆者7名に延べ14回のインタビューを行い（各2~3時間），一部に対しては追跡インタビューを実施して被爆者の戦後の経験のより広くかつ深い理解に努めている。

筆者の研究の特色とその意義は次の3つにまとめられる。1つ目は，研究者の観点ではなく被爆者自身の観点に徹底的に内在した研究である点，である。被爆者を対象とした研究は被爆者自身の問題に特化したものと，他の問題との連関や比較によりその一般化を目指したものとに分かれる。これまでは前者の研究が重要視され進められてきたがこの分野の研究の発展を目指すうえで後者も欠かせない。その一つとして，「唯一の被爆国」などの原爆をめぐる言葉やその認識枠組みが戦前から続く日本国ナショナリズムの影響のもとにあることを問題視する研究がある（米山 1999＝2005）（Naono 2005）。提示されている論点や分析のための理論は明晰であり重要だが，支配と従属，抵抗といった紋切形のカテゴリーで被爆者の経験をかたどることで，研究者の目的や意図に都合のよい物語を作り出してしまっている。被爆者自身の経験と言葉に基づいた考察が必要となる。本研究では個々人が語る被爆体験と戦後の経験，そしてそれらの語り方に着目し，どのように自己規定し，独自の観点や意識を持っているのか明らかにすることで，被爆者であることは個々人の人生の一側面でしかないことを示しえた[1)]。

2つ目は，追跡インタビューと継続的なフィールドワーク，文献収集を実施して長期的経過の把握につとめている点である。被爆者研究は1950年代より主に合同調査として実施されてきたが単発的であり内容もその時点での観測に留まっているという欠点がある。本研究では個々の被爆者の戦後の経験を，生い立ちから現在までの約70年間を視野に入れながら，戦後日本社会と関連させて考察した。その際被爆者が現在の視点から過去の経験をどのように語るかに着目することで，一貫性はありつつも単線的な時間の流れでは追うことのできない，動態的で重層的な経験を示すことができ，それは戦後社会を生きる彼／女らの生活史を明らかにすることにつながった。

3つ目は，被爆者の経験の理解可能性を追求した研究である点，である。申請者と同様に，被爆者への長期的な調査を通じて彼／女らの被爆体験，戦後経験を総合的に分析した研究は存在する（石田 1973・74）（濱谷 2005）。だが，それらは，被爆者が遂行してきた運動（国家補償に基づいた援護政策

の実施を政府に促す運動）の更なる推進という目的を達成するための研究であり，読者に共感を促すような人道主義的な被爆者の経験の解釈に重きが置かれている。運動の更なる発展や賛同者の獲得のためには必要なことだが，それは一つの結果として「核廃絶」や「平和の尊さ」といった原爆被害にまつわる常套句や抽象化された被爆者イメージの更なる流布へとつながった。そこで本研究ではそういった常套句やイメージからは捉えられない被爆者の戦後の経験に着目し，当事者が理解不可能という経験も含めて生活史を描くことを目指している。

2.　2009年度の研究成果

2009年度は筆者のこれまでの研究目的や方法，内容を踏襲しその完成を目指す形で研究を実施した。具体的には上述したインタビューやフィールドワークを継続させるとともに，次の論文執筆と学会報告を行った。前者は，①論文「原爆死没者との向き合い方―継承の実践としての被爆体験の語りに着目しながら―」『フォーラム現代社会学』（関西社会学会，第8号，pp. 31–42，2009年）を執筆し，後者は②「一生活者としての被爆者　―東友会の相談活動を通じて―」【変更：「語り部としての被爆者―家族との歩み―」】（日本オーラル・ヒストリー学会第7回大会，第2分科会，北星学園大学，9月，2009年）という題目で報告した。

①ここ数年盛んに行われている被爆体験の継承活動はより多くの聞き手を獲得している一方で，他方語り手や語る内容を制限するといった傾向を生み出している。この傾向は抽象的な被爆者イメージの生成の促進につながっており，比較的自由に語る内容を決めることができていた被爆者の多くはその点に戸惑いや苛立ちを感じている。論文では体験を語るための前提条件を明示している被爆者を対象に，その条件が孕む問題点を彼／女らの生活史と関連させながら考察することで，被爆者が未だ忘れることのない原爆死没者への向き合い方や死没者をめぐる政治的な問題（戦争責任，戦後補償など）を指摘した。

②報告では，聞き手からの真正性の基準に基づいた語りの評価について達観視している被爆者の見解と生活史を取り上げ，イメージに対する批判の可能性について考察した。被爆者にとってイメージは自己規定する取っ掛かりとなる点で有意味であるが，次第にイメージに逆に縛られ自分なりの自己規定や意識の保持がしづらくなるという重大な欠点がある。マスメディアを介して多量にかつ広範に必ずしも適切でない表現が流通することは，申請者を含む多くの非体験者の私たちにとっても被爆者の経験を適切に理解できないことにつながり，ひいてはイメージでは掬いとれない，米国の核の傘に護られた戦後日本社会への批判的想像力をもつことを困難にしてしまう。

3.　今後の課題

2009年度の成果は筆者が後期博士課程在籍中から継続して実施してきた研究の一部である。現在それを含めた形で博士論文としてまとめている最中である。その論文の中では，語りや文字を通して被爆体験を他者に伝えるという行為とそれを可能にする社会関係に焦点を当て個々の被爆者の戦後の生活史を記述していくことで，抽象的なイメージには収まりきらない被爆者の被爆体験と戦後の経験を明らかにし，最終的に彼／女らの観点がもつ戦後日本社会への批判的まなざしの重要性を指摘することを目的としている。マスメディアに登場する機会が比較的多い東京在住の被爆者はその分イメージにさらされているためそれへの感受性が鋭くなっている。イメージに直接的に対峙している彼／女らを考察の対象

とすることで，戦後日本社会の中で核廃絶を唱えることの問題性をより鮮明に表面化することができると考えている。

注

1) 八木（2006）において，被爆体験を他者に向かって長年語ってきた被爆者を対象に彼女らがどのように語ることに配慮し，またいかなる意識を持ち語り続けてきたかと問うことで，被爆者の戦後の経験を明らかにした。最も重要な点は「被爆者はつねに被爆者としてのみ生きているわけではない」ということである。対象者は被爆者であると同時に，つながりのある他者との関係により異なる多様な役割を遂行する生活者であるからだ。この提示を通して被爆者の観点に徹底的に内在するという筆者の研究の基本的視座を明確に打ち出した。

文献

藤原帰一，2001,『戦争を記憶する』講談社
濱谷正晴，2005,『原爆体験』岩波書店
石田忠，1973,『反原爆 長崎被爆者の生活史』未来社
――――，1974,『続反原爆 長崎被爆者の生活史』未来社
Naono Akiko, 2002, Embracing the Dead in the Bomb's Shadow. UMI Dissertation Services.
野上元，2008,「戦後社会と二つの戦争体験」濱日出夫編『戦後日本における市民意識の形成　戦争体験の世代間継承』慶應義塾大学出版会，pp. 1–21.
八木良広，2006,「現在を生きる原爆被害者―被爆体験を語るという実践を手がかりに」『日本オーラル・ヒストリー研究』（日本オーラル・ヒストリー学会）創刊号.
Yoneyama Lisa, 1999, *Hiroshima Traces*: time, space, and the dialects of memory. University of California Press.（＝小沢弘明・小澤祥子・小田島勝浩訳，2005,『広島 記憶のポリティクス』岩波書店）
米山リサ，2004,「廃墟のデザイン――「いま，ここ」のヒロシマにむけて」『季刊d/SIGN』No. 9，大田出版，pp. 98–101.

戦艦大和の記憶と地域社会に関する社会学的把握／記述

塚　田　修　一

1. 研究の目的

本研究は，アジア・太平洋戦争に関する過去／記憶の配置状況，およびそれらと「地域社会」とが切り結んでいる関係性の様態を，歴史–の–社会学的に把握／記述することを目的とするものである。具体的には，「戦艦大和」（の記憶，あるいはイメージ・表象）と，広島県・呉市を研究対象とするが，この「戦艦大和」（の記憶）は，従来の「戦争の記憶」研究では扱われてこなかった対象であり，その意味で，本研究は従来の「戦争の記憶」研究の更新を図るという目的も有していることになる。

2. 研究の内容

本研究は主に，Ⅰ．歴史的（＝経時的）記述，およびⅡ．現在的（≒経験的）把握，という二つの視角により進められる。

Ⅰ．歴史的記述：吉田満著『戦艦大和ノ最期』［1953］から，映画『男たちの大和』［2005］に至るまでの，1945年の敗戦以降の「戦艦大和」に関するメディア言説 - 空間を辿り，「戦艦大和」の記憶／